

史跡・名勝 嵐山

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一四―七

史跡・名勝 嵐山

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡・名勝 嵐山

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、店舗建設工事に伴う史跡・名勝 嵐山の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

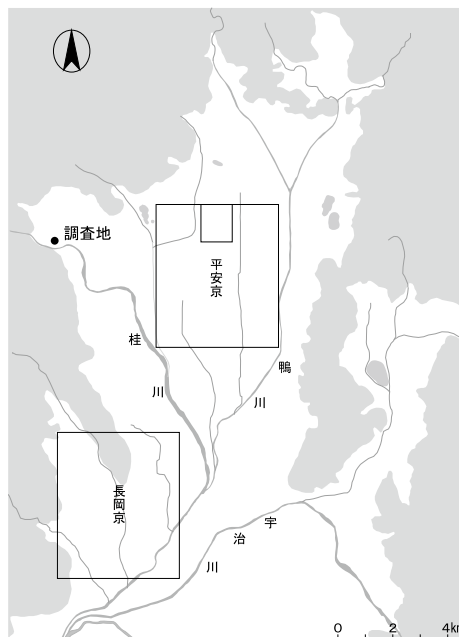
平成27年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡・名勝 嵐山
- 2 調査所在地 京都市右京区嵯峨天龍寺造路町33番地
- 3 委 託 者 株式会社 渡月橋 代表取締役社長 平井義久
- 4 調査期間 2014年6月2日～2014年8月29日
- 5 調査面積 1,354㎡
- 6 調査担当者 津々池惣一・東 洋一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「大覚寺」「嵐山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 津々池惣一・東 洋一
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員および資料業務職員があたった。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 遺跡の環境	3
(2) 臨川寺旧境内の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 室町時代前期の遺構	14
(3) 室町時代後期の遺構	19
4. 遺 物	20
(1) 遺物の概要	20
(2) 土器類	20
(3) 瓦類	21
(4) 土製品・石製品	26
5. ま と め	27

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（東から）
		2	溝1（南東から）
		3	石列4・6（東から）
図版2	遺構	1	2区全景（北から）
		2	石列12・14、磔敷15（北東から）
図版3	遺構	1	溝17（西から）
		2	落込み18・石列19（南から）
図版4	遺構	1	3区全景（西から）
		2	溝21（南東から）
図版5	遺物		軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦
図版6	遺物		鬼瓦・埴

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査前風景（東から）	2
図3	作業風景（北西から）	2
図4	調査区配置図（1：1,000）	2
図5	「山城国嵯峨龜山殿近辺屋敷地指図」元徳元年（1329）	4
図6	「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」貞和3年（1347）	4
図7	調査区全体平面図（1：500）	7
図8	調査区断面図1（1：100）	8
図9	調査区断面図2（1：100）	9
図10	2・3区南北断面図（1：100）	10
図11	1区遺構平面図（1：200）	11
図12	2区遺構平面図（1：200）	12
図13	3区遺構平面図（1：200）	13
図14	1区溝1実測図（1：40）	14
図15	2区溝13・17断面図（1：40）、礫敷15周辺平面図（1：80）	16
図16	2区落込み18・石列19実測図（1：40、1：100）	17
図17	1区建物10実測図（1：50）	18
図18	土器実測図（1：4）	21
図19	軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	21
図20	丸瓦・平瓦拓影及び実測図（1：4）	22
図21	塼拓影及び実測図（1：4）	24
図22	鬼瓦・雁振瓦拓影及び実測図（1：4）	25
図23	土製品・石製品実測図（1：4）	26
図24	「山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図」応永33年（1426）天龍寺所蔵	27

表 目 次

表1	臨川寺旧境内の調査一覧表	5
表2	遺構概要表	14
表3	遺物概要表	20

史跡・名勝 嵐山

1. 調査経過

調査地は、京都市右京区嵯峨天龍寺造路町33番地に位置する。当地は史跡・名勝嵐山に指定されている。この地に営業施設建築工事が予定されたことから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）の指導の下に公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が2009年に試掘調査を実施し、遺構の遺存状態が良好なことから開発部分全域の確認調査を実施することになった。今回の調査では、2009年に実施した試掘調査で中世整地層上面及びそれ以下に遺構が確認されたことから、関連する遺構の検出に努めた。

調査は、調査区を1区から3区に設定し、1,354㎡の範囲で調査を行うこととなった。6月2日から調査を開始し、1区から着手、2区・3区へと順次進めた。調査は、重機で遺構面まで掘削し、以後人力による作業に切り替えた。遺跡保護の観点から、遺構は平面での検出にとどめ、各調査区で京都府及び京都市文化財保護課の臨検を受けつつ調査を進めた。図面・写真等の記録を取り、遺跡保護のために砂による埋戻しを行い、調査を終了した。特に2区では、池状施設の西辺及び南辺を検出した。



図1 調査位置図（1：5,000）



図2 調査前全景（東から）



図3 作業風景（北西から）

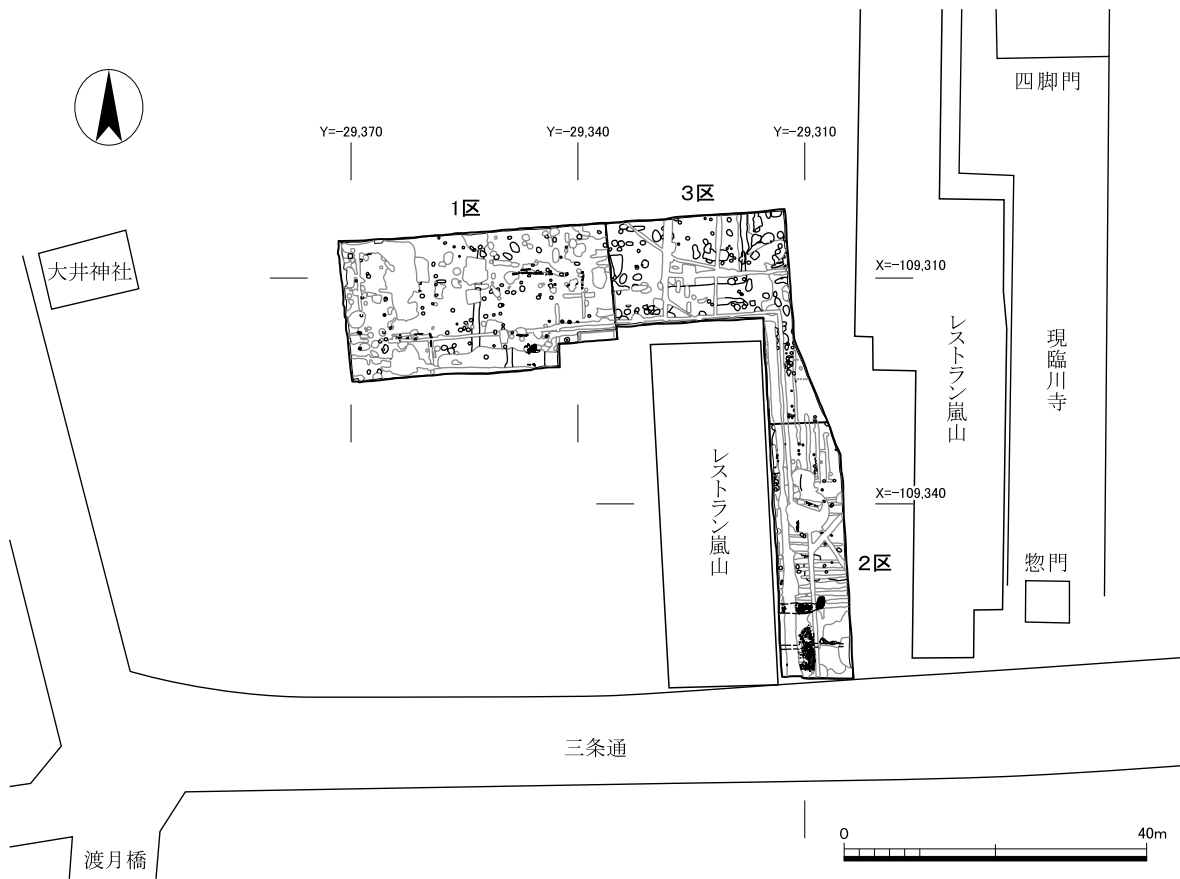


図4 調査区配置図（1：1,000）

2. 位置と環境

(1) 遺跡の環境

北嵯峨から下嵯峨にかけては、南東方向に緩い傾斜となる洪積台地であり、南嵯峨は桂川によって形成された扇状地である。この一帯での人々の生活の痕跡は旧石器時代から窺え、古墳時代には6世紀末まで、継続して前方後円墳が築造されており、また葛野大堰築造や広降寺建立で知られる秦氏の活躍で開発が大いに進められたという。さらに、北嵯峨一帯は平安時代の頃から、皇室や貴族の遊興の地となり、多くの別業、山荘や寺院が造営されてきた。鎌倉時代になると、桂川北岸に後嵯峨天皇が亀山殿を造営し、南側には別宮として、芹川殿、河端殿等を設けた(図5)。室町時代に入ると、後醍醐天皇の臨川寺建立を皮切りに、禅宗寺院が林立するようになる。

調査地が含まれる臨川寺旧境内は、天龍寺の東、渡月橋の北東に位置する。本来は後嵯峨・亀山上皇の離宮、亀山殿であり、当地は別殿御所である河端殿とその北側にあたる。臨川寺は、後醍醐天皇の皇子である世良親王が禅利寺院を建立しようとして果たせず、その遺命により元翁本元を開山に禅院を建てようとしたが、本元の入寂により中断した。その後、建武2年(1335)後醍醐天皇により、夢窓国師(夢窓疎石)を開山として創建された¹⁾。また河端殿の北側は、後醍醐天皇の論旨によって芹川の流路を替えて、臨川寺に編入された²⁾(図5・6)。

その後、夢窓国師が足利尊氏に進言して亀山殿の地に天龍寺が創建された。五山十刹の制が定められると、京都十刹の二位となり、天龍寺派に属した。新たに編入された臨川寺境内には、世良親王の報恩の塔と夢窓国師の寿塔を配し、この間に本尊の弥勒菩薩をまつる「昭堂」を設け、臨川寺開山塔頭「三会院」とした³⁾。これにより、勅願寺であり、なおかつ「五山十刹」に入る官寺としての禅宗伽藍が整った。

臨川寺は康安元年⁴⁾(1361)と永和4年⁵⁾(1378)に火災にみまわれているが、その都度再建されている。さらに応仁・文明の乱で天龍寺とともに全焼、12年後の文明12年⁷⁾(1480)には再建が進み、文明17年⁸⁾(1485)には再建された。しかし、その後も明応5年⁹⁾(1496)、明応7年¹⁰⁾(1498)、天文17年¹¹⁾(1548)に諸堂の造営が行われていたことが記されている。また、文禄5年¹²⁾(1596)には台風により建物の倒壊が記録されている。その後、江戸時代初頭¹³⁾に再建されて現在に至っている。しかし、江戸時代後半には荒廃が進んでいた模様で、天明7年(1787)の『拾遺都名所図絵』では三会院周辺は林や藪が生い茂るさまが描かれている。その後、明治4年(1871)に伽藍周囲の林、藪地は上地として没収された。

(2) 臨川寺旧境内の調査(図1、表1)

臨川寺旧境内の調査は、今回で8回目の調査となる。多くは明治時代初頭に上地令で没収された部分に該当するが、「嵐山高架道」建設のため戦後、市に譲渡された臨川寺北東部の「三会院」庭園推定部分も含まれている。以下では今日までの臨川寺境内の発掘調査について概略する。

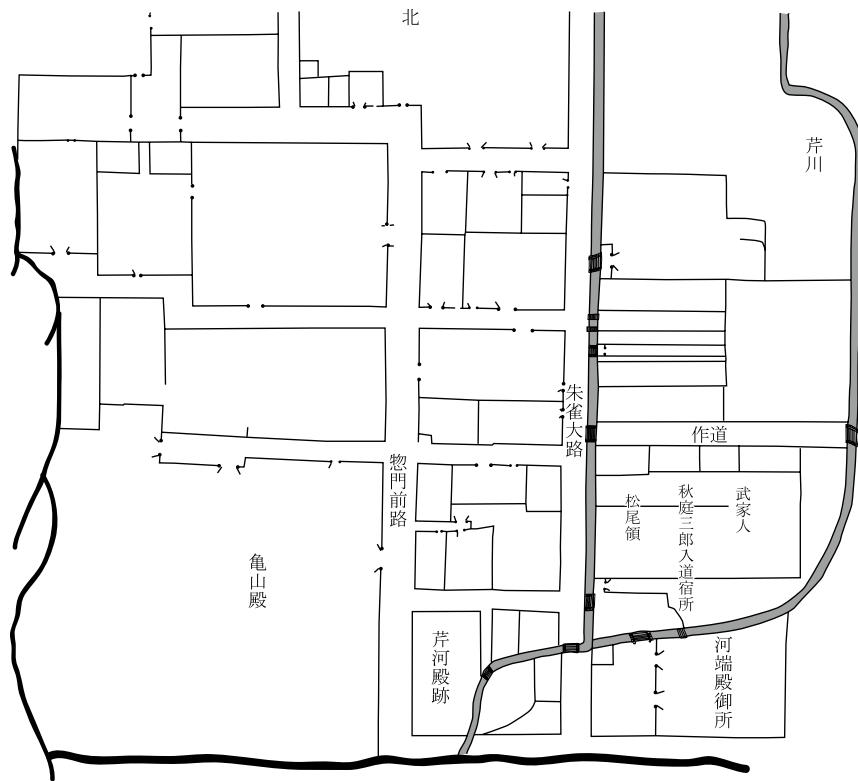


図5 「山城国嵯峨龜山殿近辺屋敷地指図」元徳元年（1329）（原図を元にトレース、一部改変）

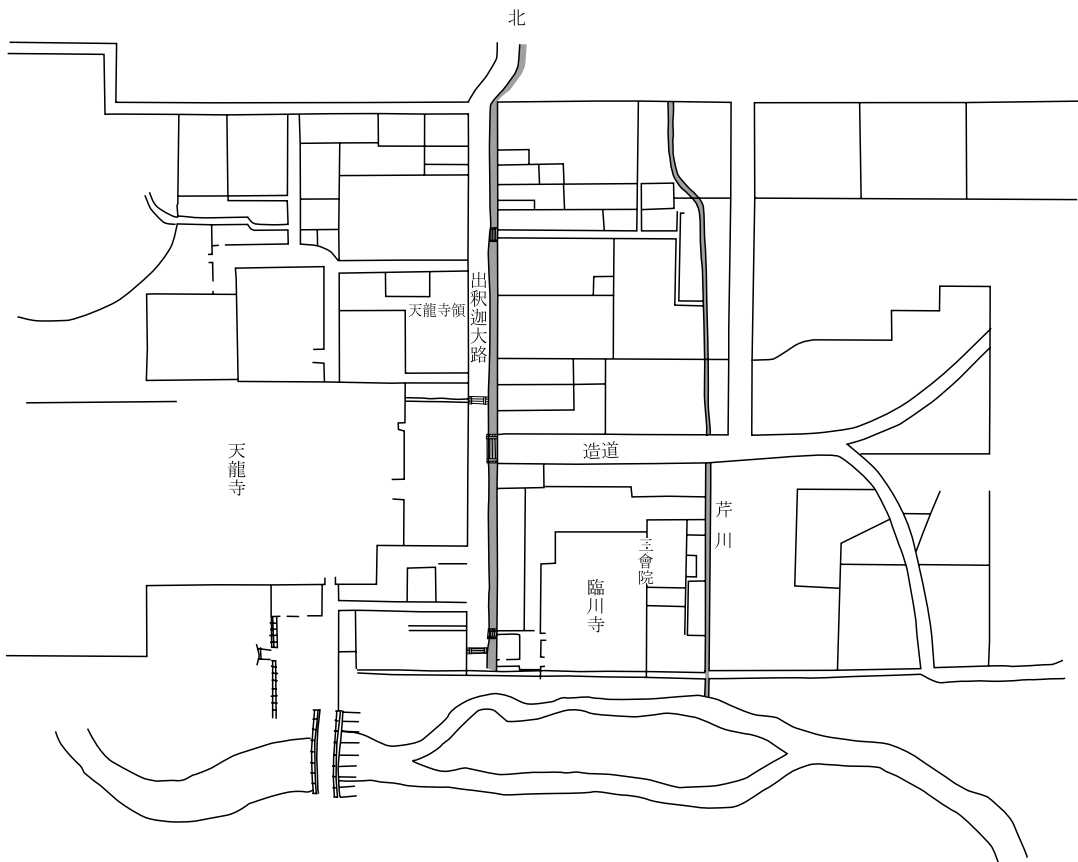


図6 「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」貞和3年（1347）（原図を元にトレース、一部改変）

※ 図5・6は『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-3 を改変して使用した。

表1 臨川寺旧境内の調査一覧表

調査番号	調査年	調査機関	文 献
①	1969年	京都市・奈良国立文化財研究所	牛川喜幸「臨川寺庭園の調査」『奈良国立文化財研究所年報1970』奈良国立文化財研究所、1970年。吉川 需「高架道路の建設と臨川寺庭園遺跡の保存」『月刊文化財 82号』第一法規出版株式会社、1970年。
②	1974年	臨川寺庭園遺跡発掘調査団	江谷 寛『臨川寺庭園遺跡発掘調査概要』1975年。 江谷 寛「臨川寺旧境内」『仏教芸術115号』毎日新聞社、1977年。
③	1975年	江谷 寛	江谷 寛「臨川寺旧境内」『仏教芸術115号』毎日新聞社、1977年。
④	1976年	江谷 寛	江谷 寛「臨川寺旧境内」『仏教芸術115号』毎日新聞社、1977年。
⑤	1977年	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	吉川義彦・中村 敦・石井 望『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告IV 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年。
⑥	2009年	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	確認調査のため報告書は刊行してない。
⑦	2012年	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	東 洋一『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 2012-1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年。

調査① 臨川寺旧境内東部に位置する「三会院」庭園跡推定地に南北を貫通する嵐山高架道が新設されることになり、橋脚部の発掘調査が行われた。天明7年（1787）刊の「拾遺都名所図絵」に描かれた園池と類似する池跡や汀の一部、護岸の石組み・庭石の一部が検出された。その他、園路や北東部で築山に推定できる遺構を検出している。13世紀後半から18世紀にかけての遺物が出土している。

調査② 1974年に嵐山美術館建設に際して行われた。北でやや西に振れる幅約3m、深さ0.8mの南北溝と、その溝に直交する東西溝が検出された。溝からは室町時代前期に近い遺物が多量に出土した。「天龍寺」銘の軒平瓦も出土している。その他、石列・ピット群などが検出された。

調査③ 臨川寺旧境内南西部の嵐山食堂改築に伴う調査が行われ、臨川寺関係と考えられた石組みの溝が4条検出された。創建期に近い瓦群が出土したと記されている。

調査④ 臨川寺三会院本堂裏の宅地開発に伴う調査で、現存する本堂と方位が同一で南北棟（3間×5間を推定）の礎石建物跡が検出された。床に漆喰が塗られていたが、赤く変色していた。出土遺物は多量の天目茶椀などの輸入陶磁器などが出土している。出土瓦から室町時代前期の臨川寺創建期の建物とされている。「三会」銘墨書土器や「天龍寺」銘軒平瓦なども出土している。

調査⑤ 臨川寺旧境内の北東部に該当する瀬戸川と嵐山高架道間で調査が行われた。平安時代前期から江戸時代後半以降の溝・土坑・柱穴などの遺構を検出している。遺構の主軸が真北から西へ振れ、付近の地割りと同方向のものが多く指摘され、特に溝SX01は同じく主軸が西に傾き調査区西壁に沿って長さ約22m検出され、北端で西に直角に途切れると報告されている。

調査⑥ 1975年調査地点の北側で小規模な遺構確認調査が行われた。中世の遺物包含層と攪乱断面から平安時代前期の土師器皿を含む溝状遺構を検出し、中世遺物包含層の下に砂礫層が確認された。

調査⑦ 京福電鉄嵐山駅構内のリニューアル工事に伴う調査で、中世土坑や幕末・時期不明土坑などが検出されている。特に2区土坑22は1977年調査で検出したSX01と北東隅と直線的に繋

がる可能性があること、また西端で南に折れ曲がる可能性が高いことが指摘されている。

註

- 1) 「20 後醍醐天皇繪旨（宿紙）和泉国塩穴庄、伊勢国富津御厨、・・・右所々、為臨川寺領、可令管令給者 元弘三年七月二十三日 疎石上人御房」（原田正敏『天龍寺文書の研究』思文閣出版、2011年）
- 2) 「26 後醍醐天皇繪旨（宿紙）臨川寺北、道蘊屋地所被寄附当寺也、建武二年正月二十五日 夢窓和尚方丈」（同上）とあり、河端殿の北側は「山城国嵯峨龜山殿近辺屋敷地指図」（元徳元年：1329）には「武家 秋庭三郎入道 宿所 松尾領」（図5・6参照）とあるが、建武2年には、「道蘊」すなわち二階堂貞藤の所領となっていたものを、後醍醐天皇の繪旨によって臨川寺に編入された。（原田正敏『天龍寺文書の研究』思文閣出版、2011年）
- 3) 『臨川家訓』「因ト寺後奉安報恩御之塔、其傍又構卯塔以表開山之儀、中立弥勒堂、充両塔之昭堂、因号三会院」（国訳禅学大成第二十三卷 二松堂書店、1930年所収）
- 4) 康安元年（1361）「康安元年辛丑牛冬十月。臨川寺為丙丁所崇・・・十八日佛殿山門立柱。廿六日上梁。又方丈華功。」とあり、康安元年に臨川寺は被災にあったが「佛殿山門」「方丈」などが再建されていく記述がみられる。（『普明国師行業実録』『続群書類従第九集下』続群書類従完成会、1925年所収）
- 5) 永和4年（1378）「永和四年十一月三十日。夜半臨川寺廻祿。」とある。（『花宮三代記』『続群書類従第二十六集』続群書類従完成会、1932年所収）
- 6) 応仁2年（1468）「七日甲子。天龍寺。臨川寺等火」とあり、火災の記述がみられる。（『続史愚抄』後土御門御門天皇 応仁二年九月七日甲子条『国史大系十四卷』吉川弘文館、1931年所収）
- 7) 文明12年（1480）「晴、昨日人数令同道帰京、嵯峨乱後始而一見、諸寺諸院以下悉以焼失、荒野也、天竜寺、臨川寺等、如形取立者也」とあり、再建が行われている。（『宣胤卿記』文明十二年九月七日甲甲の条『史料大成42』内外書籍株式会社、1943年）
- 8) 文明17年（1485）「横川東雲同途而往三会。自昭堂至客殿。」「自臨川寺大門至三会山門前」等の記述が見られ、再建は完成しているとみられる。（『蔭涼軒目録』文明十七年六月十五日条『蔭涼軒目録二』史籍刊行会、1954年所収）
- 9) 明応5年（1496）「明応五年 臨川寺佛殿并衣鉢閣造営納下帳 六月」（原田正敏『天龍寺文書の研究』思文閣出版、2011年）
- 10) 明応7年（1498）「明応七年 臨川寺山門再興造営帳 正月十一日」（同上）
- 11) 天文17年（1548）「天文十七年 雲居庵昭堂造営下行帳 十二月吉辰」（同上）
- 12) 文禄5年（1596）「(七月晦日カ) 影堂倒矣。臨川寺亦同前。天龍寺諸堂・方丈同前。雲居亦同。諸院相残分妙智・慈濟迄之由。鹿王院昭堂崩云々。可嘆時哉。」（『鹿王目録』文禄五年七月晦日の条『鹿王目録第三卷』続群書類従完成会、1935年所収）
- 13) 『自慶長九辰至慶安四卯寺院造営諸牒十三冊』文部科学省文書史料館所蔵（旧臨川寺文書）の「元和八戌 三会昭堂再造」「正保四亥 三会中門造営」等の記述が示されている。（参照：川上 貢『禅院の建築（新訂）』中央公論美術出版、2005年）

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査地の基本層序は、調査地の1区では、現代盛土が地表下0.3m前後までである。その下は0.3～0.5mまで黒褐色系の近世整地層（東端では厚さが0.1mに満たない）、0.5～0.7m前後まで室町時代後期の整地層、0.7～1.1mまで室町時代前期の整地層となっている。また、1区南端付近ではその下に部分的に平安時代前期の遺物包含層が見られる。それ以下は砂礫の地山層となっている。また、2区は、南側ほど近世整地層や現代盛土が薄く、南端部では地表下0.1m前後で遺構面となる。それ以下ではシルト系の河川堆積層となっている。

調査の結果、室町時代前期の整地層上面で、1区：溝1・落込み2・溝3、2区：石列12・溝13・石列14・礫敷15・整地面16・溝17・落込み18・石列19、3区：溝21などを検出した。また、室町時代後期の整地層上面では、1区：石列4～8・溝9・建物10・焼土11、2区：焼土20、3

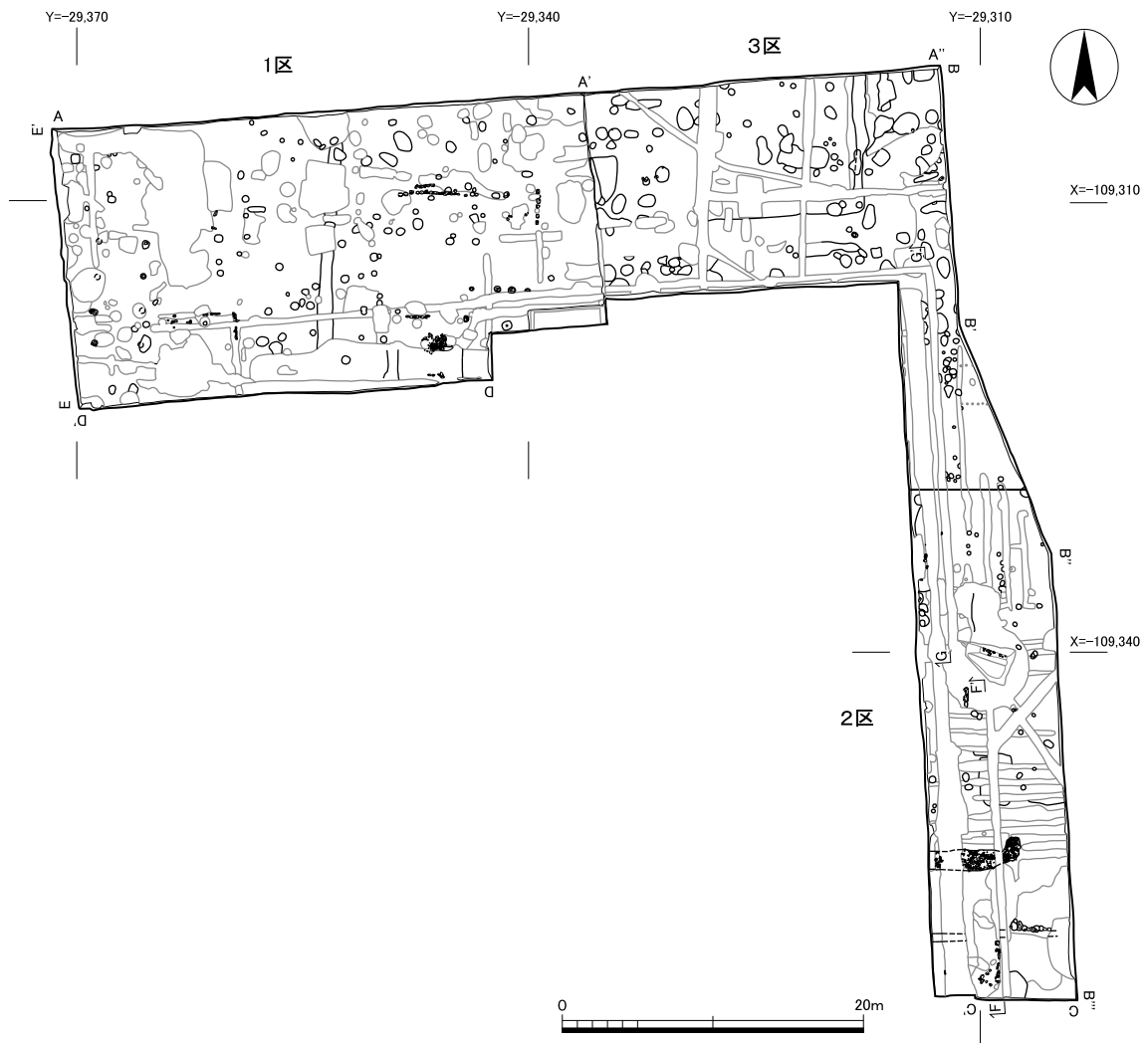


図7 調査区全体平面図（1：500）

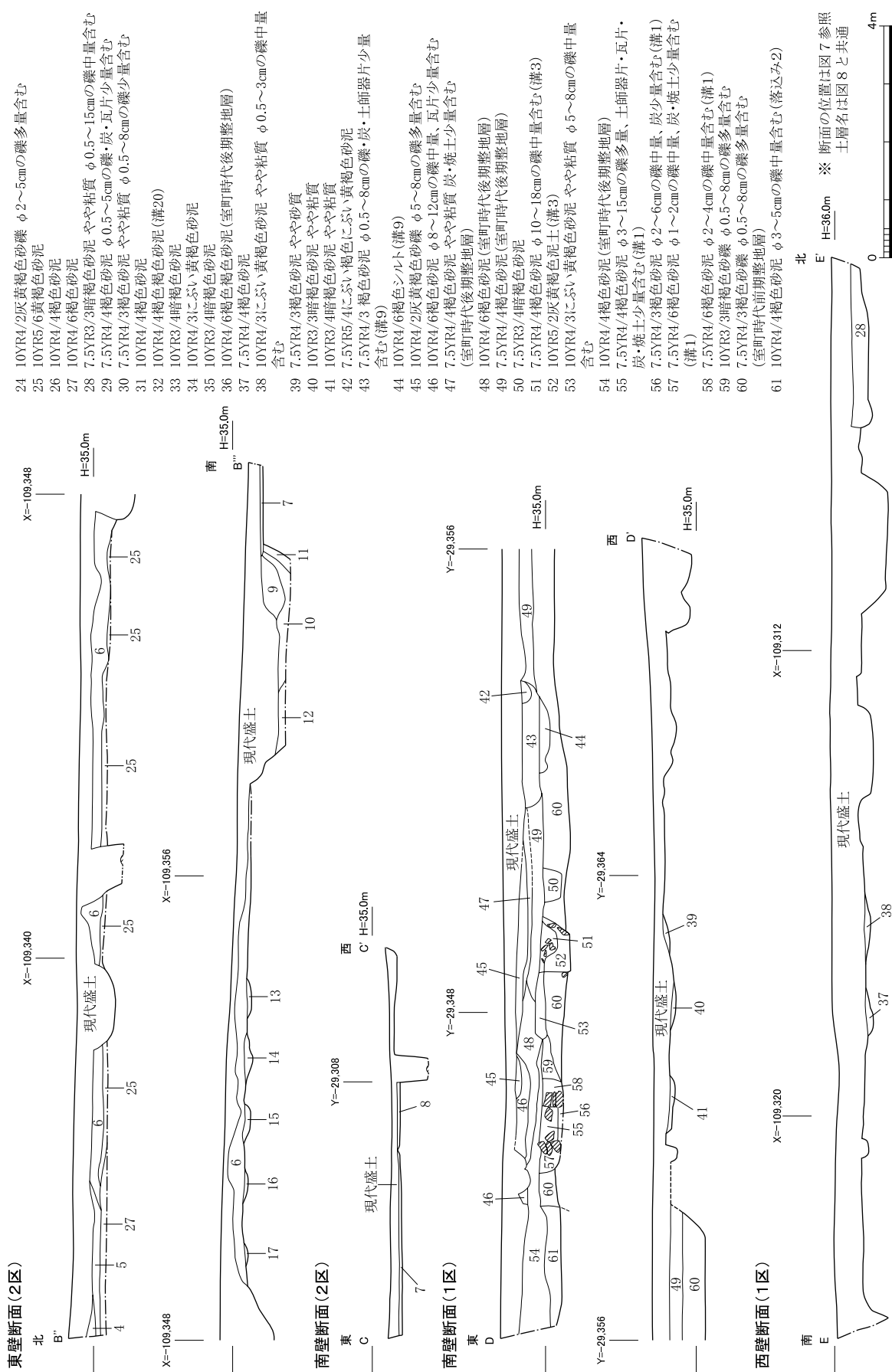
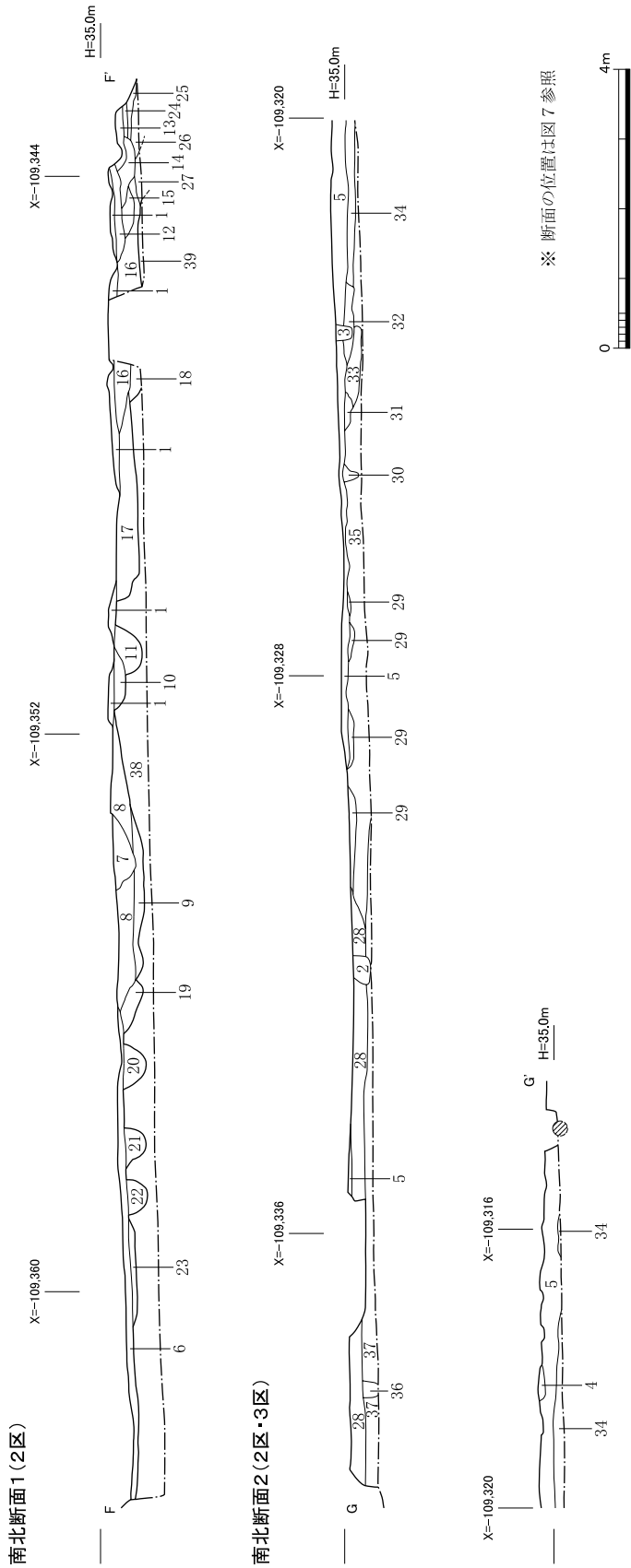


図9 調査区断面図2 (1:100)



- | | | | | | |
|----|------------------------------------|----|-----------------------------------|----|----------------------------------|
| 1 | 10YR4/6褐色砂泥 | 14 | 5YR5/4にぶい赤褐色砂泥 | 27 | 10YR4/6褐色砂泥 |
| 2 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ2~5cmの礫中量含む | 15 | 10YR4/4褐色シルト | 28 | 10YR6/4にぶい黄褐色シルト |
| 3 | 7.5YR4/3褐色砂泥 φ0.5~3cmの礫少量含む | 16 | 10YR4/4褐色シルト 土器器片微量含む | 29 | 7.5YR5/6明褐色砂泥 φ1~6cmの礫中量含む |
| 4 | 7.5YR3/3暗褐色砂泥 やや粘質 | 17 | 10YR4/4褐色砂泥 φ5~10cmの礫中量、炭・焼土少量含む | 30 | 7.5YR4/4褐色砂泥 やや粘質 |
| 5 | 10YR4/4褐色砂泥 φ0.5~4cmの礫・土器器片・瓦片少量含む | 18 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト | 31 | 7.5YR3/3暗褐色砂泥 |
| 6 | 10YR6/6明黄褐色砂泥 炭・焼土中量含む | 19 | 10YR4/6褐色砂泥 | 32 | 7.5YR4/3褐色砂泥 |
| 7 | 5YR4/8赤褐色砂泥 φ5~12cmの礫・瓦片多量含む | 20 | 10YR4/4褐色砂泥 | 33 | 7.5YR4/3褐色砂泥 |
| 8 | 10YR4/4褐色砂泥 炭・焼土中量含む | 21 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 34 | 7.5YR4/4褐色砂泥 |
| 9 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭・焼土中量含む | 22 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ2~4cmの礫中量含む | 35 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト |
| 10 | 10YR3/4暗褐色砂泥 炭・焼土中量含む | 23 | 10YR4/4褐色砂泥 φ2~5cmの礫中量含む | 36 | 10YR6/4にぶい黄褐色シルト |
| 11 | 10YR4/4褐色シルト | 24 | 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 | 37 | 10YR4/6褐色砂泥 φ0.5~8cmの礫多量含む |
| 12 | 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 φ0.5~8cmの礫多量含む | 25 | 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥 | 38 | 10YR5/5黄褐色シルト(地山) |
| 13 | 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥 土器器片少量含む | 26 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ2~6cmの礫・炭・焼土少量含む | 39 | 10YR3/3暗褐色砂泥 φ0.5~10cmの礫多量含む(地山) |

図10 2・3区南北断面図 (1:100)



図11 1区遺構平面図 (1:200)



Y=-29,310

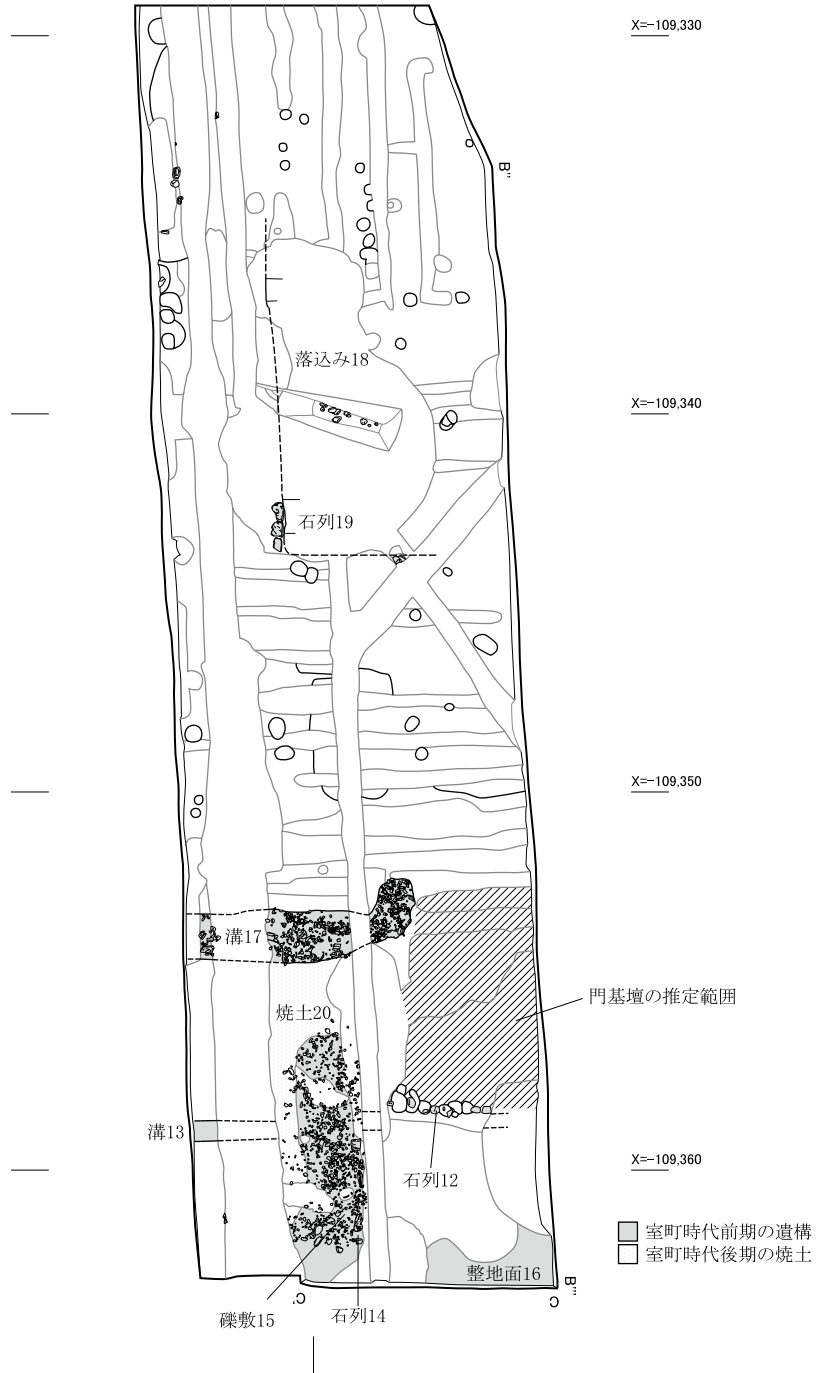


図12 2区遺構平面図 (1 : 200)

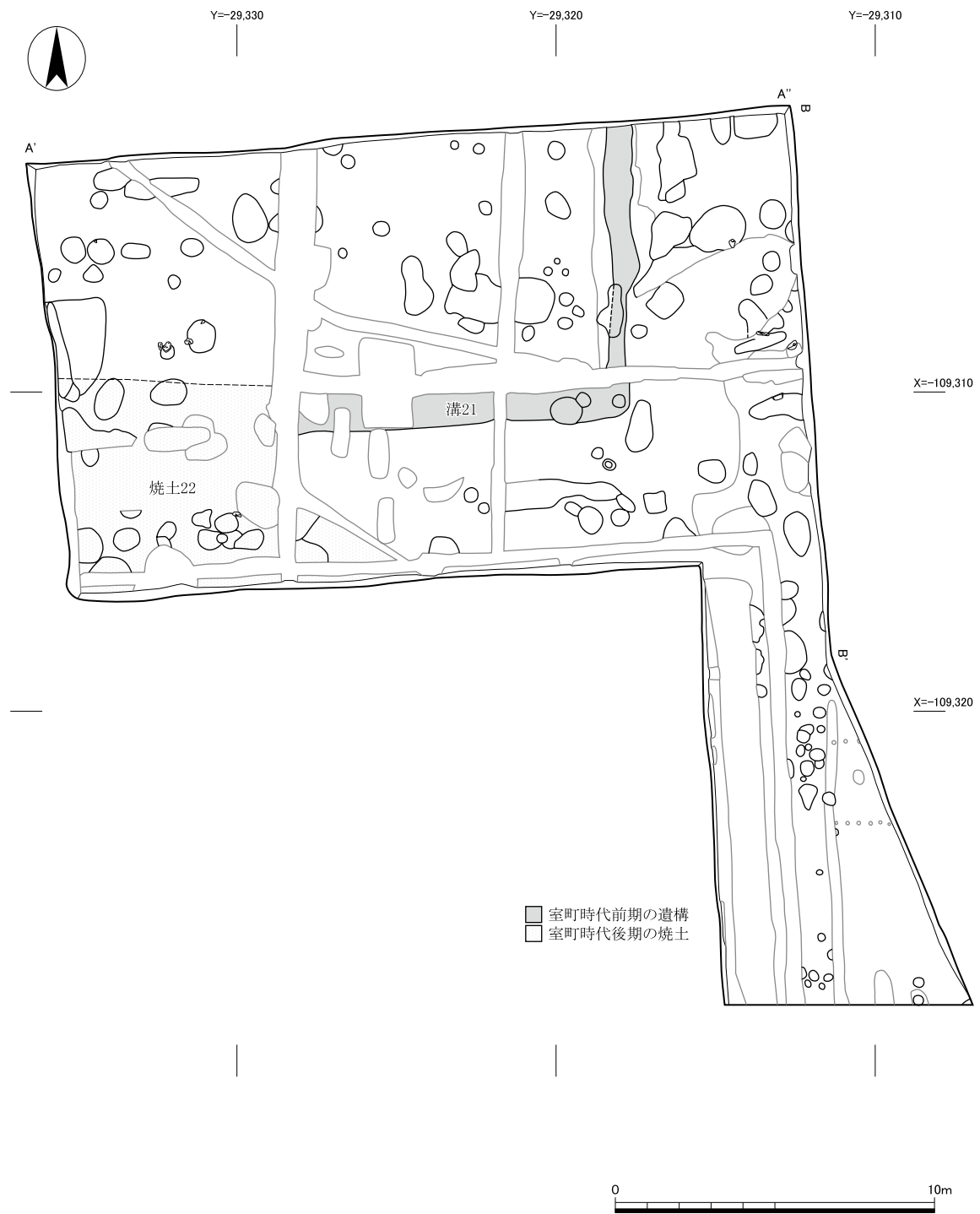


図13 3区遺構平面図（1：200）

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
室町時代前期	1区：溝1、落込み2、溝3 2区：石列12、溝13、石列14、礫敷15、整地面16、溝17、落込み18、石列19 3区：溝21	
室町時代後期	1区：石列4～8、溝9、建物10、焼土11 2区：焼土20 3区：焼土22	

区：焼土22などを検出した。

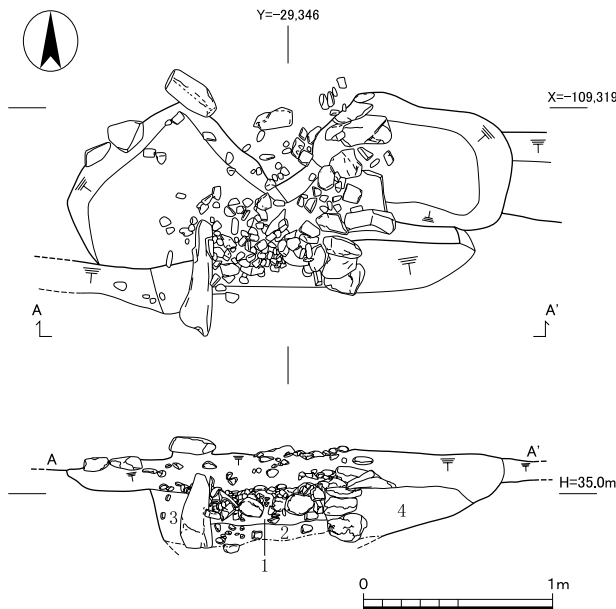
なお、室町時代の整地層は遺構保存のため掘削していないので、下層（室町時代前期）の遺構や整地層は室町時代後期の整地層のない部分や攪乱を除去し検出したもので、部分的に確認できたものである。

(2) 室町時代前期の遺構

1区 (図11、図版1-1)

溝1 (図14、図版1-2) 調査区南端部で検出した南北方向の石組みの溝である。検出した規模は長さ3.0m、幅0.5m、深さ0.2mである。南は調査区外に延びる。北端で東に屈曲して止まると見られる。検出した範囲の中央部分は攪乱により壊されている。自然石の平坦面を内側に向けた状態で並べている。溝の中には瓦・埴・礫が詰まっている。調査区の南で実施された1975年調査(表1-③)で検出された3条の石組み溝の1つの延長部と思われる。出土瓦と遺構検出面により

室町時代前期の遺構と考える。



- 1 7.5YR4/4褐色砂泥 φ3～15cmの礫多量、土師器片・瓦片・炭・焼土少量含む
- 2 7.5YR4/3褐色砂泥 φ2～6cmの礫中量、炭少量含む
- 3 7.5YR4/6褐色砂泥 φ2～4cmの礫中量含む
- 4 7.5YR4/6褐色砂泥 φ1～2cmの礫中量、炭・焼土少量含む

図14 1区溝1実測図(1:40)

落込み2 調査区南端、溝1の東側で検出した。検出した規模は東西2.0m、南北1.5mで、東方向は調査区外に、南北方向は室町時代後期の整地層下に延びる。東側に落ち込む。

溝3 溝1の西2.0mで南北方向の溝を検出した。検出した規模は南北2.0m、幅1.0m、深さ0.5mある。南側は調査区外に、北側は室町時代後期の整地層下に延びる。埋土に石は散見されるが石組みはない。室町時代前期の段階の区画溝である可能性もある。

2区 (図12、図版2-1)

石列12 (図15、図版2-2) 調査区南部で検出した。東西方向の石列で、延長

2.6m、一部の石は動いている可能性もあるが、南側に平坦面を揃えて7石並ぶ。石の大きさは長軸が0.2～0.3mである。南西側にある南北方向の石列14と直交する方向である。

溝13 (図15) 石列12の下層で検出した同一方向の溝である。幅は0.3m、深さは0.1mである。検出した長さは3mであるが、西側は調査区外に延びると考えられる。溝は石列14と礫敷15に先行するものである。

石列14 (図15、図版2-2) 南北3.0mで、東側に石の長軸方向の平坦面を揃えて3石を確認した。その間には小ぶりの石が含まれる。石の大きさは長軸が0.2～0.4mである。石列12と直交する。

礫敷15 (図15、図版2-2) 石列14の西側に広がる。拳大の礫を集積した礫敷である。南北3.4m、東西1.0～2.2mで南北方向に長い。礫敷の直下は河川堆積土のシルト層が堆積しており、検出した礫敷は基底部と思われ、石列14に伴う裏込めと思われる。

整地面16 (図15) 調査区の南端部で検出した。平面では東西3.5m、南北1.5mを検出した。断面観察から、範囲は東西方向の石列12から南側、南北方向の石列14より東側に広がる。数層の薄い土層で形成されており、整地面16はその一部が剥がれている状態で検出された。きめ細かい土で覆われ路面状である。この部分からは室町時代の土器の小片が出土している。

溝17 (図15、図版3-1) 石列12の北側4mで検出した。東端部は北にゆるやかに屈曲して浅くなる。検出した規模は長さ5.7m、幅1.3m、深さ0.3mである。屈曲部は石列12の西端と揃う。埋土には瓦や焼土が多く含まれる。瓦は室町時代のもので占められる。

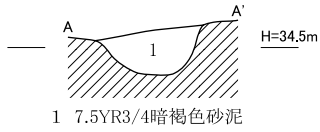
落込み18 (図16、図版3-2) 調査区中央部やや北側で検出した。検出した規模は東西3.0m、南北4.0mである。深さは2.1mある。東と北は室町時代後期の整地層下に延びる。落込みの西肩から底部にかけて粘質土を貼り付けている。それ以下は砂礫層の地山である。底部の主にシルトから構成される粘土質層の上に堆積する緑灰色シルト質粘土層は、滞水による土色の違いを示すと思われる。後述する石列19は落込み18の西辺と南辺に施された護岸施設と考えられる。落込み18は西辺と南辺が直線的に直交する池状遺構とみられる。埋土上層からは室町時代後期の土師器が出土しているが、最下層からは室町時代前期の瓦器鍋が出土している。

石列19 (図16、図版3-2) 南北方向に石の長軸を並べ東に面をもたせる3石と、東3m地点で東西方向に並べ北に面をもたせる2石を検出した。東西方向の2石の西延長は、南北方向の3石と直交する。これらは落込み18の西辺と南辺に据えられたとみられるが、この間は石が抜き取られたものとみられ、残存していなかった。この状況から、落込み18は西側と南側が直線的な池状遺構と推察され、石列19はその肩口の護岸施設とみられる。

3区 (図13、図版4-1)

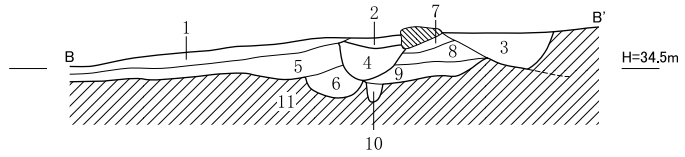
溝21 (図版4-2) 中央部で検出した。南北方向から東西方向に逆L字形に曲がる溝である。南北方向の溝は9mを検出、調査区北に延びる。東西方向の溝は10mを検出、西側の室町時代後期整地層下に延びる。深さは0.2m前後である。北西方向に想定される建物の南東部を限る溝と考えられる。

溝13(西部)



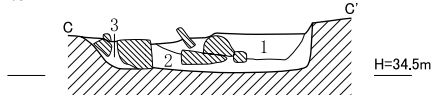
1 7.5YR3/4暗褐色砂泥

溝13(東部)



- 1 10YR6/4こぶい黄橙色砂泥 φ1~5cmの礫中量含む
- 2 10YR5/8黄褐色砂泥
- 3 10YR5/4こぶい黄褐色砂泥 瓦片・焼土少量含む
- 4 10YR5/8黄褐色砂泥 φ1~10cmの礫中量含む(溝13)
- 5 10YR4/6褐色砂泥
- 6 10YR5/6黄褐色砂泥 φ1~5cmの礫・炭・焼土少量含む
- 7 10YR5/6黄褐色砂泥
- 8 10YR4/4褐色砂泥 φ1~5cmの礫中量含む
- 9 10YR5/4こぶい黄褐色砂泥 φ1~5cmの礫・炭・焼土少量含む
- 10 10YR4/6褐色砂泥
- 11 10YR4/3こぶい黄褐色砂泥

溝17



- 1 5YR3/4暗赤褐色砂泥 φ10~15cmの礫少量、瓦片中量、焼土多量含む
- 2 5YR2/3極暗赤褐色砂泥 焼土多量含む
- 3 10YR4/6褐色砂泥 φ7~10cmの礫少量含む

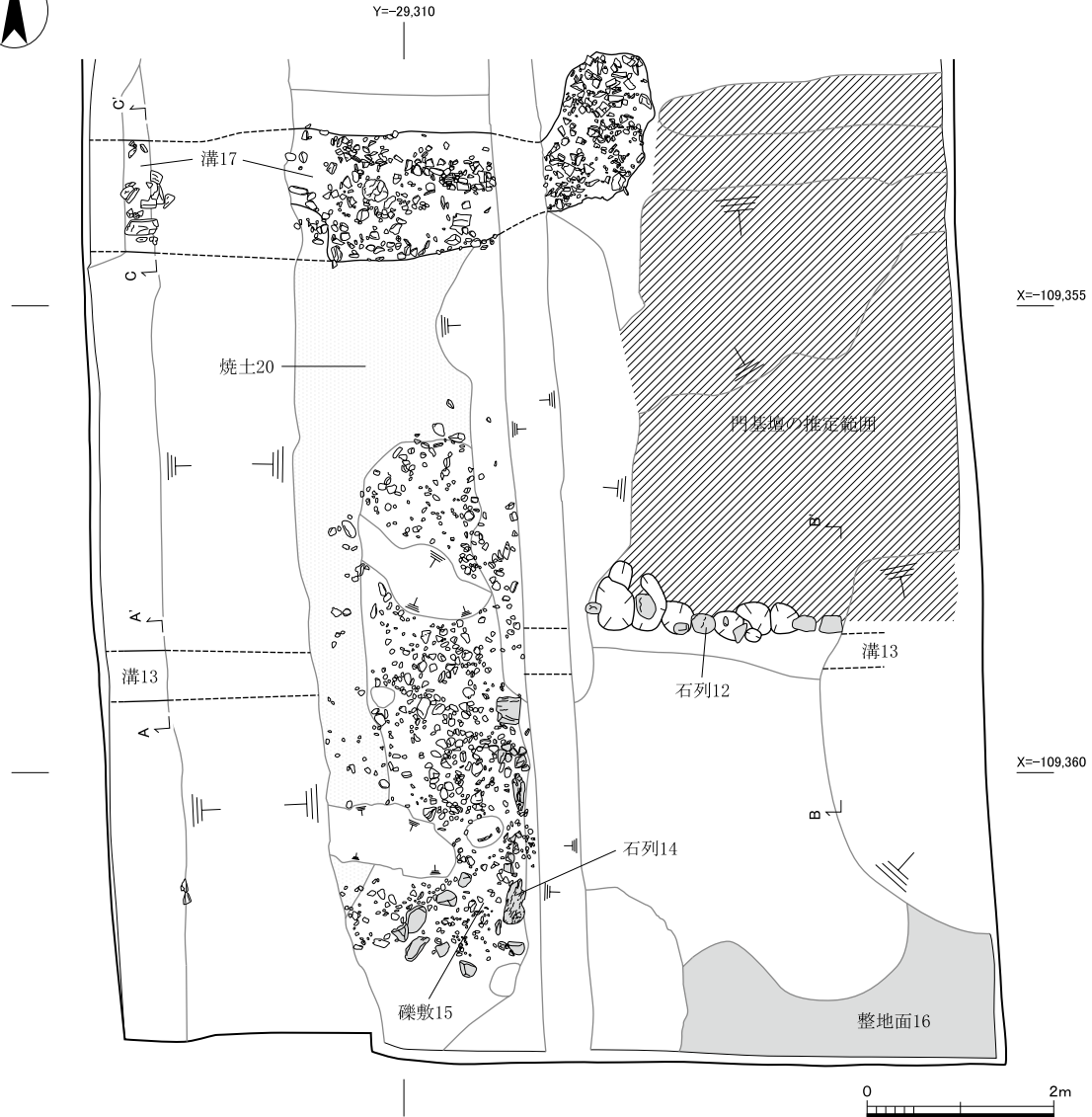


図15 2区溝13・17断面図(1:40)、礫敷15周辺平面図(1:80)

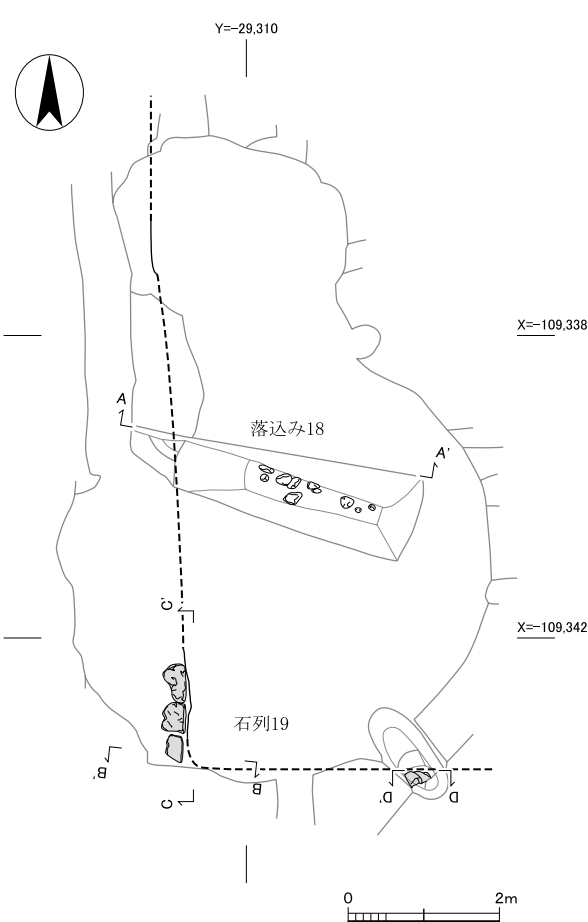
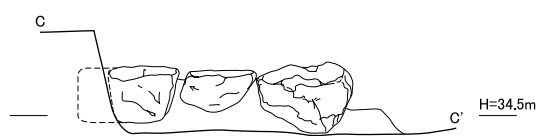
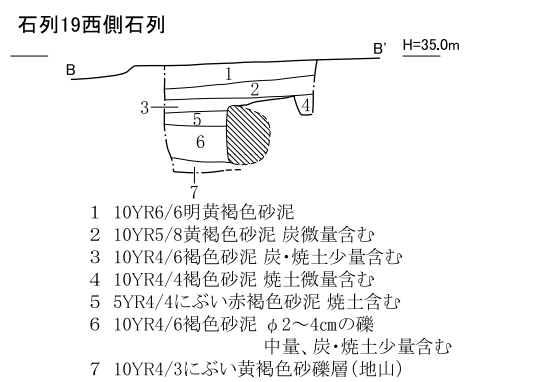
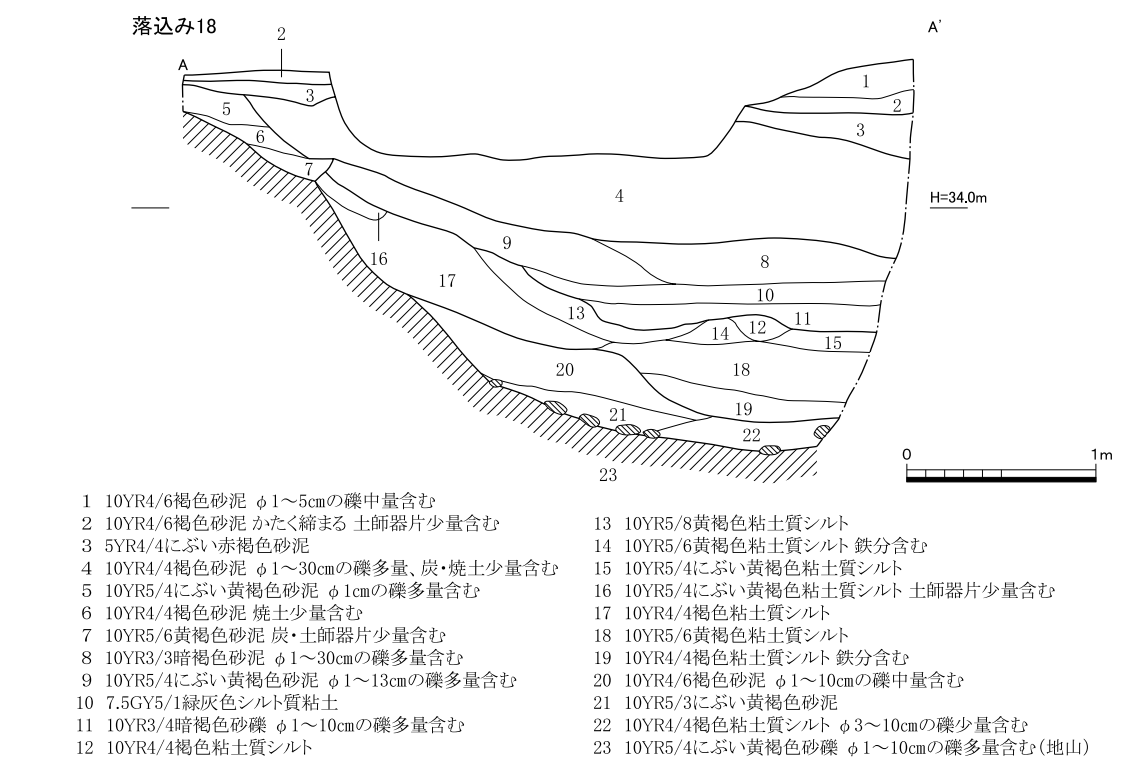


図16 2区落込み18・石列19実測図 (1:40, 1:100)

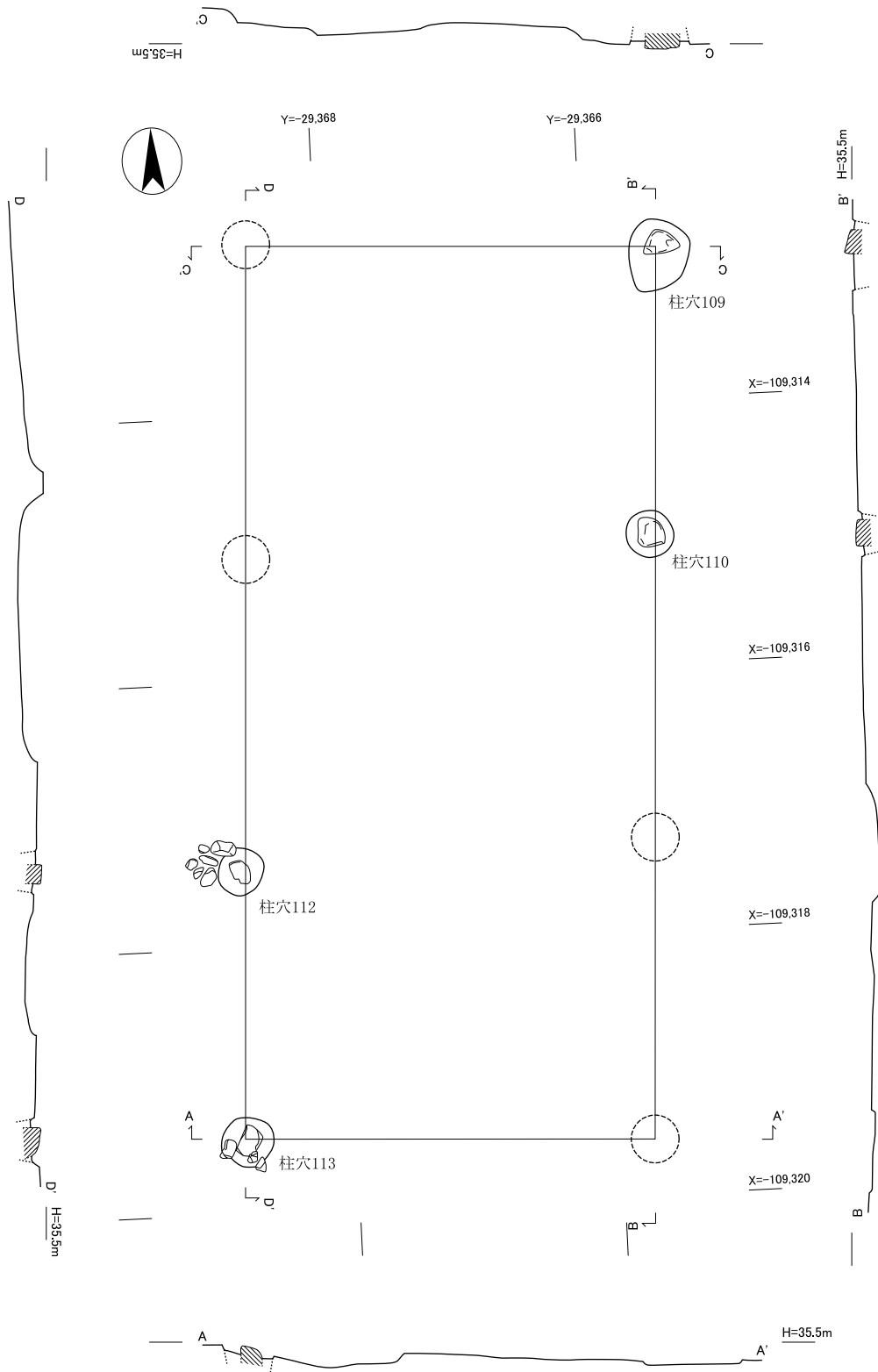


图17 1区建物10实测图 (1 : 50)

(3) 室町時代後期の遺構

1区 (図11、図版1-1)

石列4～7 (図版1-3) 石列4は調査区北東寄りで見出した東西方向の石列である。2列で対をなし、平坦面を外側に揃える。石列の検出した長さは6.5m、2列の石列間の幅は0.5mで、石の大きさは0.25m前後である。南側は整地土が火を受け焼土(焼土11)となっている。築地状遺構の基底部と思われる。石列5は石列4の南8.0mで東西方向に平行する。長さ1.5mほどが残存する。石の面は北側に揃える。石の大きさなどは石列4に近似する。石列6は石列4・5の東側にあり、直交方向に位置する南北石列である。長さは3.0mで7石ある。石列は1列で、1.0m前後の間隔をおく。石の規模は0.2mほどである。石列7は石列6の南方向で見出した東西の石列である。3石あり、石の間隔は1.0mある。石の大きさは0.3mほどである。

以上のすべての石列には火を受けて赤色化しているものがある。また、後述の南北溝9より東側に焼土が拡がっており、石列はすべて焼土範囲内に位置している。

石列8 調査区の南西部で見出した。東西方向の石列と南北方向の石列が逆L字状に繋がる。東西方向の石列は長さ4.0mで、6石残存していた。南北方向の石列は長さ1.7mで、4石残存していた。南西方向に想定される建物に関連する区画と思われる。

溝9 調査区中央部で見出した南北溝である。南北とも攪乱に壊され、検出した規模は長さ15.0m、幅1.0m前後、深さ0.2m前後ある。石列4及び石列5の西側に位置し、これら石列の関連する建物の西限を画すると考えられ、焼土11は溝の東に拡がる。

建物10(図17) 調査区西端で見出した。東西1間、南北3間の南北棟である。柱間は桁行が2.0m前後で、梁行3.0mである。柱穴掘形は不明瞭で、礎石の大きさは0.3m前後である。

焼土11 調査区東側で見出した。範囲は東西18m、南北は11mである。溝9の東側、石列4の南側に拡がる。東は3区焼土22につながる。

2区 (図12、図版2-1)

焼土20 (図15) 調査区南寄り、礫敷15の西側、北側に拡がる。検出した範囲は南北7.5m、東西0.5～2.0mである。検出状況から西側にも拡がると思われるが、現代攪乱により確認できなかった。室町時代後期の整地層の上面で見出しており、それ以降の時期と思われる。1区から3区に見られる焼土層と近似する時期の可能性はある。

3区 (図13、図版4-1)

焼土22 1区焼土11の東側への延長部分である。東西10m、南北6mの範囲を見出した。東側及び南側に拡がると思われるが、東側は攪乱で削平され、南側は調査区外となる。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

遺物はコンテナに64箱分出土した。土器類は20箱分で、瓦類が多い。遺物は大半が室町時代から近世のもので、室町時代整地層上面に成立する土坑や柱穴・溝などからの出土である。

平安時代ものには、土師器、須恵器、緑釉陶器などがあるが極めて少ない。鎌倉時代のものには、土師器、焼締陶器、輸入磁器などがあるが極めて少ない。室町時代のものには土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、瓦、埴がある。江戸時代のものには土師器、焼締陶器、施釉陶器、国産磁器、瓦などがある。

(2) 土器類 (図18)

瓦器鍋 (1) 口径12.6cm、残存高6.0cmである。体部はやや内湾気味に立ち上がり、肩部で屈曲させて外反し、口縁端部は内側につまみあげる。頸部、体部上面は指押え調整している。口縁部内外面には炭素が吸着する。体部外面には煤が付着する。胎土は密で、淡黄灰色を呈する。胴部が外に膨らんでおり、口縁端部の傾きが低い。室町時代前期。2区落込み18最下層から出土。

瀬戸灰釉椀 (2) 口径16.2cm、残存高5.1cmある。体部は斜めに立ち上げ、口縁端部はすぼまる。内面全体と外面の体部の下半まで施釉する。室町時代後期。1区溝9から出土。

土師器皿 (3・4) 3は口径10.6cm、高さ2.5cmある。体部は斜めにのび、口縁部は外反して、端部は丸く収める。底部に丸みがある。表面は磨滅しており調整は不明である。室町時代後期。2区礫敷15西側整地層から出土。4は口径12.8cm、残存高2.4cmある。体部は外反しながら斜めにの

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器	1箱		1箱	0箱
鎌倉時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類	2箱		2箱	0箱
室町時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類、石製品	22箱	土師器2点、瓦器1点、施釉陶器1点、軒丸瓦2点、軒平瓦5点、丸瓦2点、平瓦1点、埴4点、鬼瓦5点、雁振瓦1点、石臼1点	20箱	0箱
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦類	41箱		41箱	0箱
時期不明	土製品、石製品	—	土錘1点、硯1点、基石1点	—	—
合 計		66箱	28点 (2箱)	64箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、掲載遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

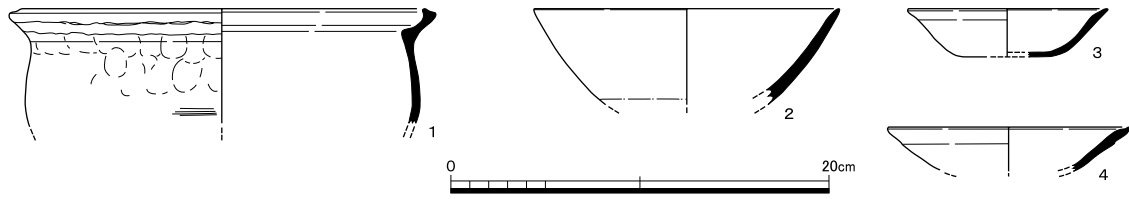


図18 土器実測図（1：4）

び、口縁端部はつまみあげて丸める。胎土は砂粒が見られるが密で、焼成は良好である。室町時代後期。1区溝9から出土。

(3) 瓦類（図19～22、図版5・6）

三巴文軒丸瓦（5・6） 5は巴が左巻きである。外区には9個以上の珠文を巡らす。瓦当面全面に離れ砂が付着する。この軒丸瓦は臨川寺、相国寺などに使用された半截菊花唐草文軒平瓦とセットになる可能性がある。火を受けているためか全体的に白い。胎土は小石を含み、焼成はやや軟質である。室町時代前期。2区溝17から出土。

6は巴が右巻きである。外区には4個以上の珠文を巡らす。半截菊花唐草文軒平瓦に対応する。胎土は大粒の石も含まれるが密である。焼成はやや軟質である。火を受けて明燈色に変色している。室町時代前期。2区南東部の攪乱から出土。

半截菊花唐草文軒平瓦（7～11） 7は瓦当部の貼り付け断面が斜めに切られていることから、瓦当貼り付け式である。中央部分である。中心飾りに半截の菊花を置き、左右に唐草を展開してい

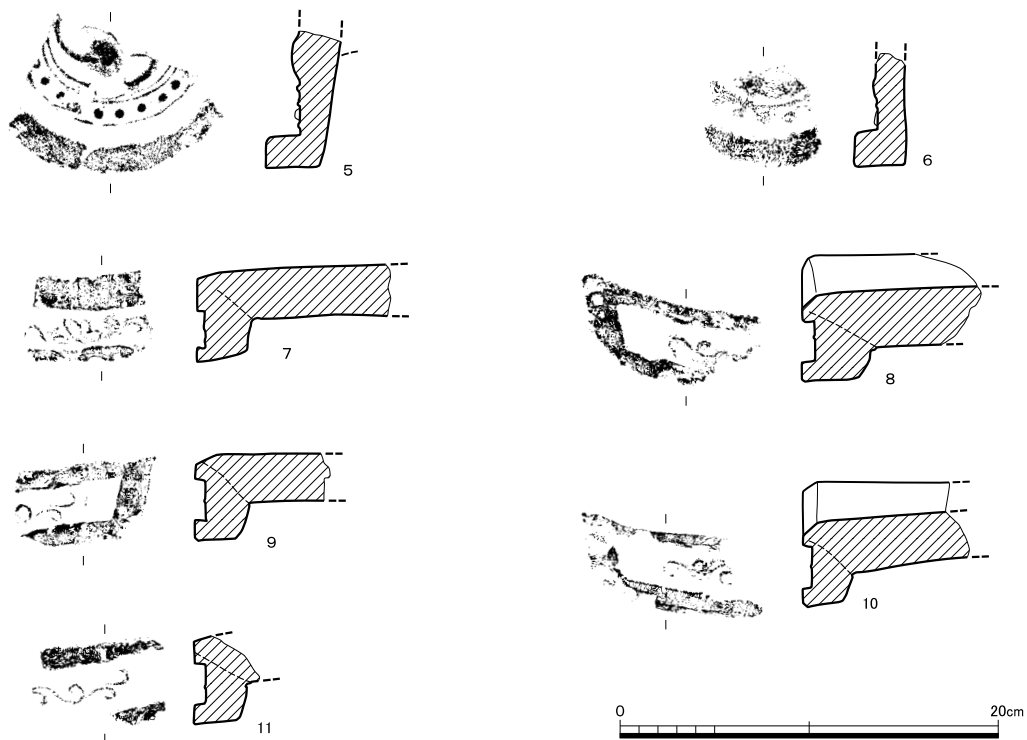


図19 軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）

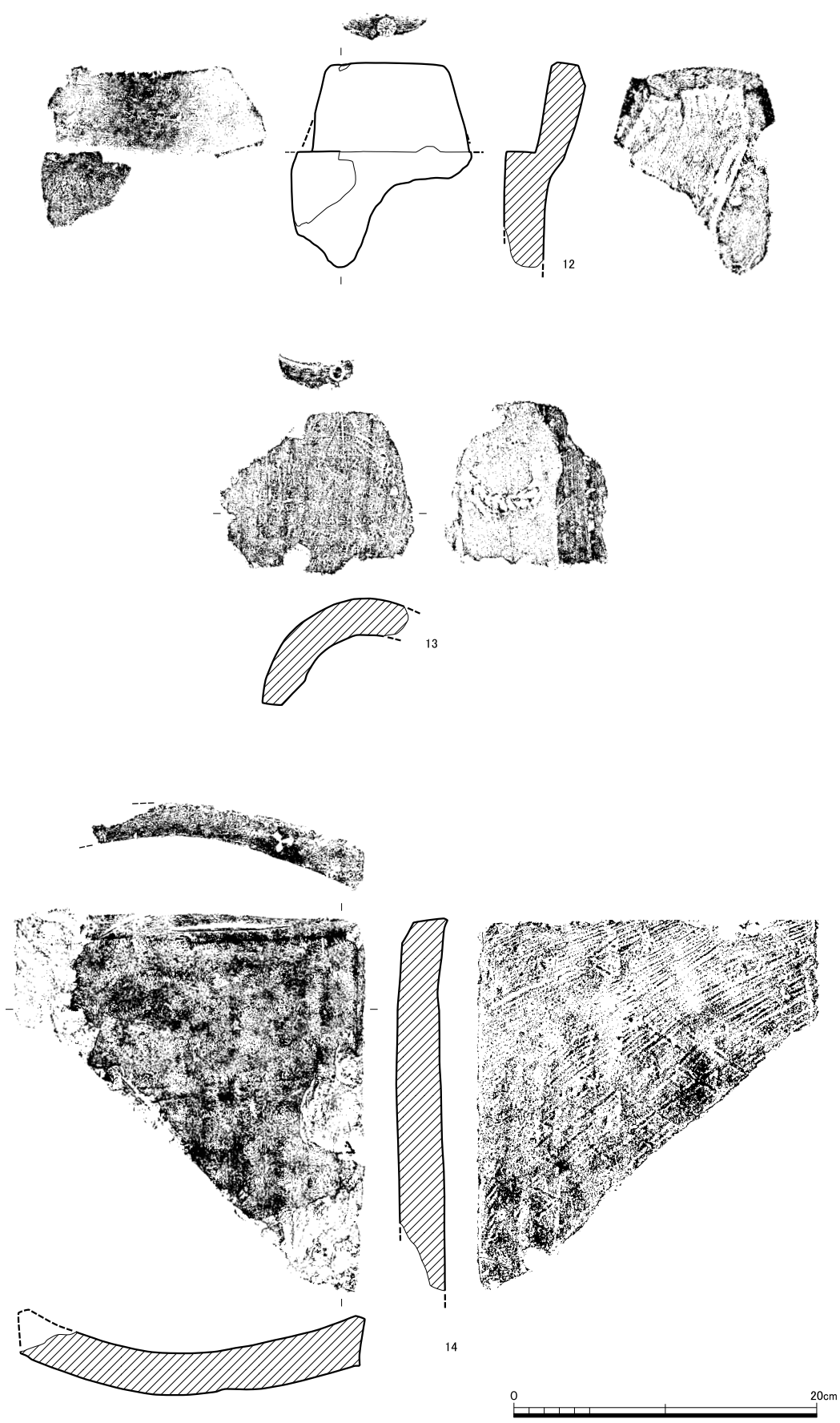


图20 丸瓦・平瓦拓影及び実測図（1：4）

る。離れ砂は瓦当表面と下顎部に付着する。胎土は小石を多く含む、焼成は良好である。器表、内部ともに白色化しており、二次焼成によるものと考えられる。2区溝17付近の攪乱から出土。

8は瓦当貼り付け式である。左脇部分である。瓦当面に離れ砂が付着している。顎下面の離れ砂の有無は器表が粗いため不明で、下顎面の面取は磨滅で不明である。胎土は大粒の石が混入し粗い。焼成は硬質である。室町時代前期。6と同一の攪乱から出土。

9は瓦当部と平瓦部に斜め方向の接合の隙間が残る。瓦当貼り付け式の典型である。右脇部分である。唐草は右に展開している。瓦当面に離れ砂が付着、顎下面にも少量の離れ砂が付着する。胎土は大粒の石を含みやや粗く、焼成は硬質である。火を受けて一部赤色化している。室町時代前期。6と同一の攪乱から出土。

10は瓦当貼り付け式である。左脇部分である。瓦当上面、下面に狭い面取りを施す。離れ砂は瓦当全面及び顎下面の右端部に付着する。胎土は砂粒などを含むが、焼成は硬質である。火を受けて一部燈色化が認められる。室町時代前期。6と同一の攪乱から出土。

11は右側脇部分である。瓦当部は貼り付け式である。瓦当表面、下顎部には離れ砂が付着する。胎土には小石が散見し、やや粗い。焼成は硬質である。室町時代前期。1区石列6付近の攪乱から出土。

丸瓦(12・13) 12は玉縁部である。裏面に布目と斜め方向の糸切り痕がある。表面には炭素が吸着している。玉縁端部に菊花文を押す。胎土は淡灰色で密、焼成は軟質である。室町時代。1区石列4北西付近の攪乱から出土。

13は玉縁部である。裏面に布目がある。表面には炭素が吸着している。玉縁端部に竹管文を押す。胎土は淡灰色で密、焼成は軟質である。室町時代。1区石列6付近の攪乱から出土。

平瓦(14) 凹凸両面に離れ砂が付着するが、凹面は横ナデによって大部分が消される。また、無文のタタキの単位がわずかに認められる。凸面には斜め方向の糸切り痕(コビキA)が明瞭に残り、格子のタタキを施している。上端を面取した狭端面に三つ葉の刻印を押す。胎土は小石混じりで粗い。焼成は硬質である。室町時代前期。1区溝1付近の攪乱から出土。

塼(15～18) 15は角部分である。成形後の調整は粗いナデを施す。胎土は石粒が多く含まれ粗い。焼成は良好である。2区溝17付近の攪乱から出土。

16は裏に斜め方向の糸切り痕(コビキA)とタタキ目が付着する。表面は無文のタタキを施し、端部は緩い面取りを施している。側面に竹管文を押す。胎土は小石が見られるが少し粗い。焼成は硬質である。1区溝9東の攪乱から出土。

17は裏に斜め方向の糸切り痕(コビキA)と格子タタキ目が全面に残る。表面は使用されて露出した砂などによってざらついている。胎土は砂・石粒が多く混ざる。焼成は硬質である。室町時代後期。1区石列6西側整地層上面から出土。

18は裏面に斜め方向の糸切り痕(コビキA)が残り、両面には離れ砂が付着する。表面はナデもしくは無文のタタキが施されている。側面はヘラ切りによって平坦に調整する。胎土に石粒が多く混ざる。焼成は硬質である。1区溝9西側から出土。

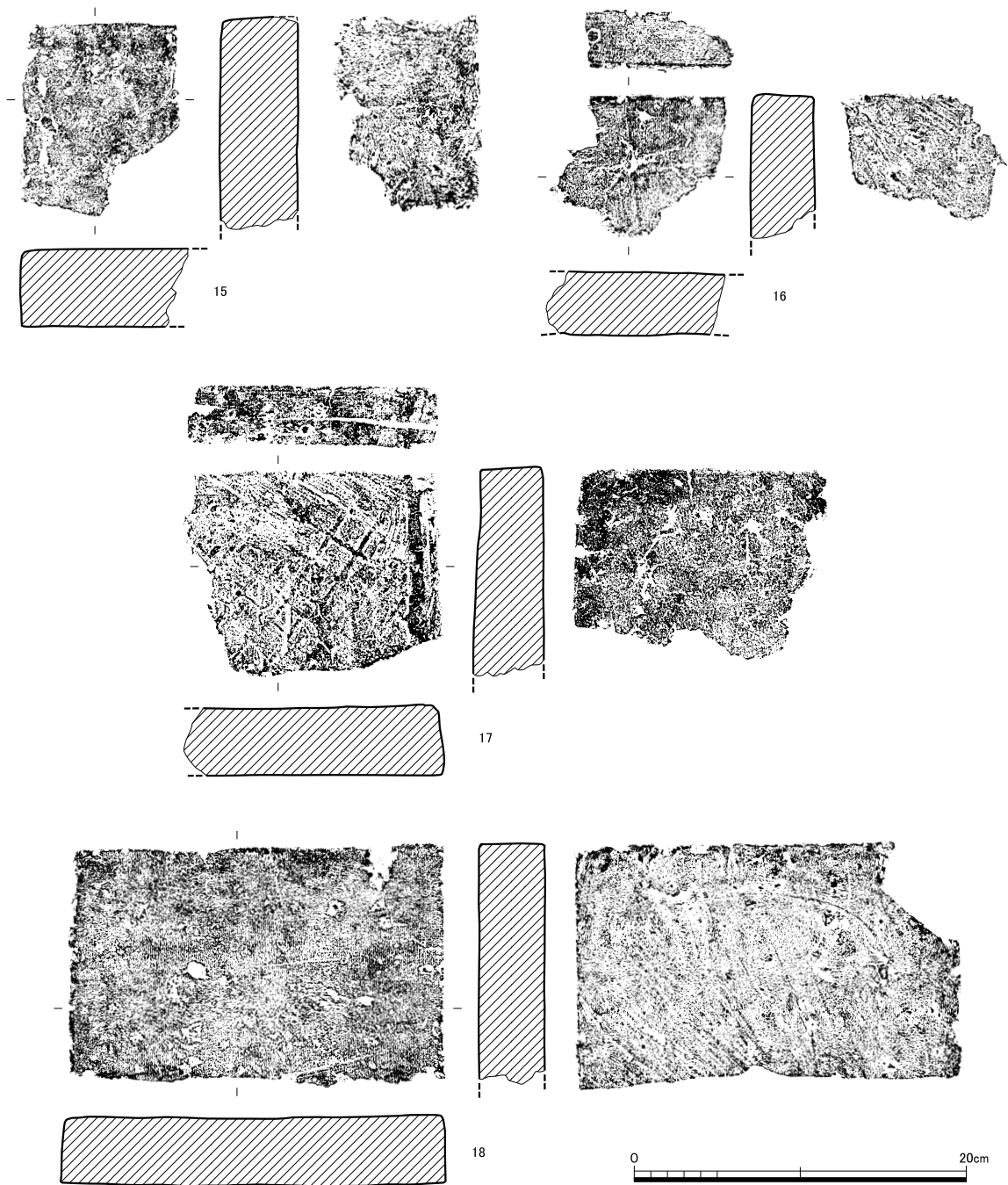


図21 埴拓影及び実測図（1：4）

鬼瓦（19～23） 19は下側張り部である。裏面を除き丁寧にナデ、調整する。裏は浅く抉れている。2本のヘラによる平行線を入れ、その間に竹管文で連珠を配する。胎土には小石を多く含む。焼成は良好で硬質である。室町時代前期。2区石列14の東側土坑から出土。

20は髭部分か眉部分である。19と同一土坑から出土しており、焼成状態や胎土から、同一個体の可能性もある。内側の粘土は指によって抉っている箇所がある。焼成は良好で硬質である。室町時代前期。2区石列14の東側土坑から出土。

21は肩部と思われる。裏の抉り込みに指の痕が残る。ヘラで連珠枠線を引き、竹管で連珠文を表

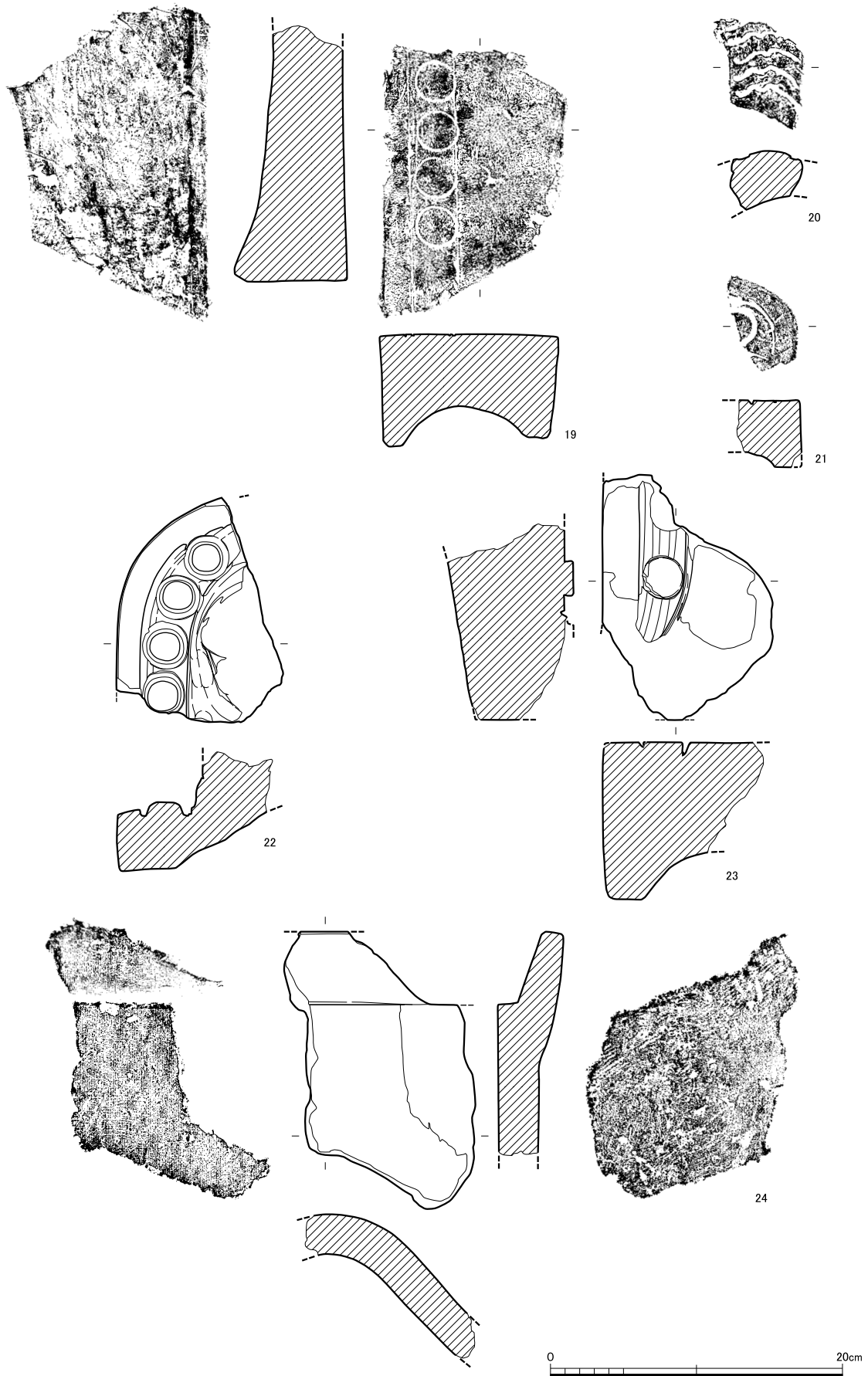


图22 鬼瓦・雁振瓦拓影及び実測図（1：4）

現している。胎土には小石が含まれ、やや粗い。火を受けて明燈色に変化している。室町時代前期。1区西壁から出土。

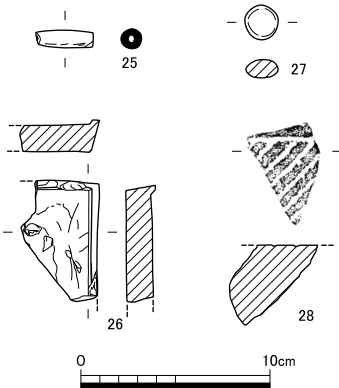
22は肩部である。周縁に珠文を入れるが型でスタンプして個別に作る。裏面の抉りは指で行っている。胎土は密で、焼成は良好で硬質である。室町時代前期。3区溝21南東隅付近の攪乱から出土。

23は外縁部である。体部はいわゆる型作りで仕上げ、裏面の抉り込みは指でなでた痕が残る。連珠部はヘラなどで溝状に抉り、その上に型で作った連珠を置く。表面はヘラなどでなでて艶がある。火を受けて明燈色になっている。胎土は小石が散見されるが密である。室町時代前期。1区石列6の東側攪乱から出土。

雁振瓦 (24) 裏面に細かい布目と斜め方向の糸切り痕 (コビキA) が残る。表面に丁寧な横ナデを施す。2区溝17付近の攪乱から出土。

(4) 土製品・石製品 (図23)

土錘 (25) 長さ2.7cm、径0.9cmで、径0.2cmの穴をあけている。表面は赤色化、胎土は淡黄灰色で密であるが脆い。時期は不明。2区攪乱から出土。



硯 (26) 瓦製硯の陸部の一部である。長さ6.0cm以上、幅4.2cm以上、高さ1.5cmある。胎土は暗青灰色、密で良く締まる。表面は銀化する。使用部分は磨滅により灰色になっている。時期は不明。2区遺構検出面の整地土から出土。

基石 (27) 径1.8cm、厚さ0.5cmある。暗緑色をしている。表面が磨かれて艶がある。2区落込み18南東の攪乱から出土。

石臼 (28) 播り目は0.5cm間隔で、深さ0.1cmの刻み目が施される。使用により滑らかである。室町時代。1区整地層から出土。

図23 土製品・石製品実測図
(1 : 4)

5. まとめ

今回の調査で得られた成果は、1区を中心とした室町時代後期の遺構群と2区を中心とした室町時代前期の遺構群に分けられる。以下に、記述する。

室町時代後期の遺構群について

1区の石列4～7・溝9に関して、石列は溝9より東側に展開する。東西方向の2つの石列4・5と南北方向の石列6は「コ」字状に位置している。また、焼土11の範囲も溝9より東に拡がり、東西方向の2つの石列の範囲とほぼ重複し、どの石列にも赤色化した石が含まれることから、これらは寺院内の一連の施設（建物）の範囲を示しており、火災によって焼失したことが窺える。また、建物10・石列8は東側の施設と方位がほぼ揃うことから同時期のものと思われる。

室町時代前期の遺構群について

2区南端部の東西方向の石列12は南北方向の石列14と直交しており、その南側の整地面16は硬く締まり路面状となっている。また、石列12から北側へ40m地点で検出した東西方向の溝17は東端で北に屈曲して止まる。これらの検出状況から、南向きの門の西端部とその西に付属する土塀などの基底部にあたる遺構群と考えられる。つまり、東西方向の石列12は、門の前面基底部の石列である可能性がある。また、南北方向の石列14は、石列12の西端で直交し南側に突出することから、門の袖部の土塀状遺構基底部の東面南北方向石列にあたると思われる。その西側の礫敷15は、石列14の基底部（裏込め）と思われる。また、東西方向の溝17は、門の西に延びる内溝と考えられ、東端の屈曲は門基壇の西側にあたり北に折れていると考えられ、図24の○印部分にあたりとみて

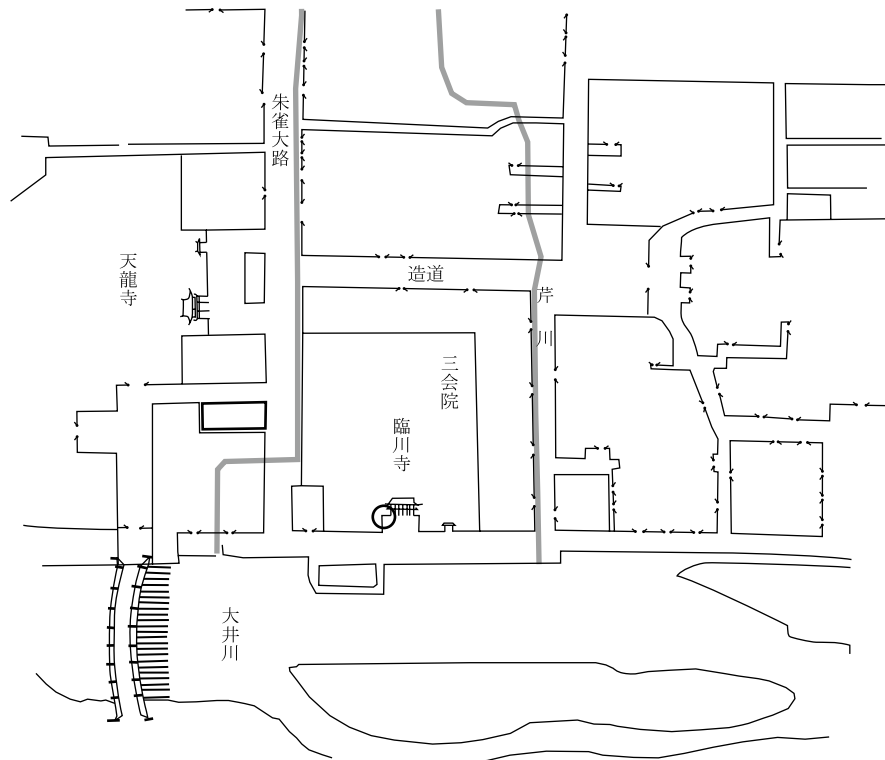


図24 「山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図」 応永33年（1426） 天龍寺所蔵（原図を元にトレース、一部改変）

いる。現存の臨川寺（三会院）の南門も今回検出した遺構の東側に位置しており、門と築地、袖部の構成も同様である。

2区の落込み18と石列19で構成される遺構は、底部及び法面に粘質土を敷き詰めていること、その直上には滞水によって還元されたと思われる（緑灰色）粘質土層が堆積していることなどから、池状施設を想定する。西辺と南辺に設置された石列（石列19）は、池の護岸と見られる。この池状施設は、門の内側と想定される位置で、門の左端付近から東に展開する模様で、遺構の西側と南側の直線的な形状からは方形が想定される。京都五山の禅宗寺院では、門の内側に左右の池を配している。また、その形状は長方形に近い。こうした例から、この池状遺構は、ある時期京都五山でもあった臨川寺に付属する放生池とみ¹⁾たい。過去の発掘事例では、京都五山であった万寿寺旧境内の調査で方形の池を検出している。

そして、3区の溝21に関しては、寺院内の建物を囲う区画溝と考えられ、門と考えられる遺構群より池状遺構を挟んだ北西に展開している。禅宗寺院では七堂伽藍の施設として、三門・仏殿・法堂を直線的に配置する事を原則とし、仏殿前の左右に僧堂と庫院、三門の斜め前方の左右に東司、浴室を配置する事が基本であったことから、東司相当施設の南東隅部分を画する溝の可能性があると¹⁾思われる。

今回の調査で、臨川寺の遺構は室町時代後期整地層以下の遺構が一部攪乱などにより壊されているものの、全面的に残っている事が判明した。また、寺域の南限や伽藍施設の一部についても判明してきた。今回調査で不明な部分については、今後の調査にゆだねたい。

註

- 1) 菅田 薫『平安京左京六条四坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-29 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年

参考文献

『日本歴史地名大系第27巻 京都市の地名』平凡社 1979年

『京都の五山寺院』京都市文化財ブックス第23集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課 2009年

川上 貢『禅院の建築（新訂）』中央公論美術出版 2005年

圖 版



1 1区全景（東から）



2 溝1（南東から）



3 石列4・6（東から）



1 2区全景（北から）



2 石列12・14、礫敷15（北東から）



1 溝17 (西から)



2 落込み18・石列19 (南から)



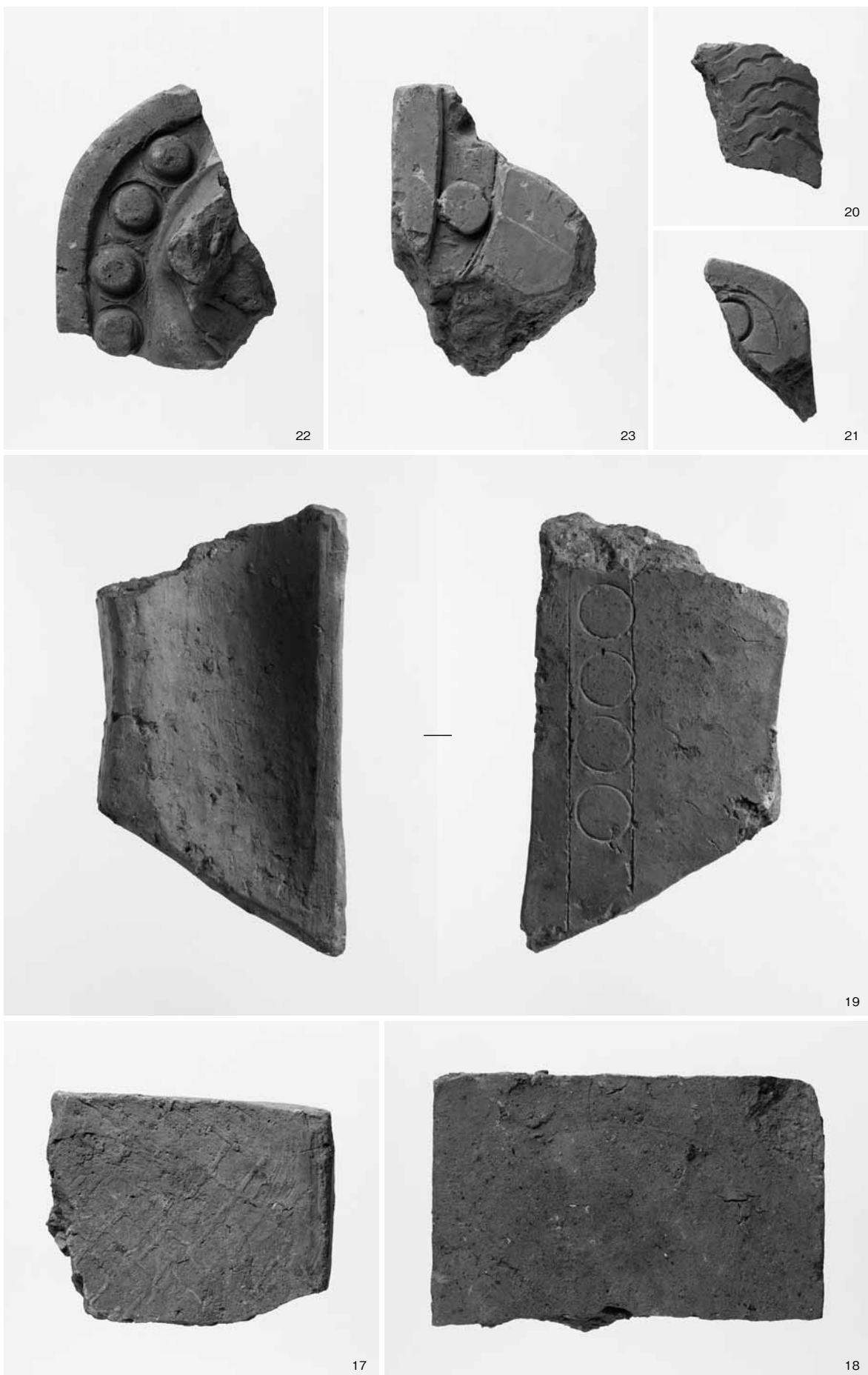
1 3区全景（西から）



2 溝21（南東から）



軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦



鬼瓦·博

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき・めいしょう あらしやま							
書名	史跡・名勝 嵐山							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2014-7							
編著者名	津々池惣一・東 洋一							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき・めいしょう 史跡・名勝 あらしやま 嵐山	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さがてんりゅうじ 嵯峨天龍寺 つくりみちちよう 造路町33番地	26100	A809	35度 00分 51秒	135度 40分 43秒	2014年6月 2日～2014 年8月29日	1,354m ²	店舗建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡・名勝 嵐山	史跡・ 名勝	平安時代	包含層	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器		室町時代の整地層を2層検出し、その上層上面で室町時代後期の遺構群、その下層上面で室町時代前期の遺構群を検出した。		
		室町時代前期	門関連施設、池、区画溝	土師器、瓦器、瓦、埴				
		室町時代後期	築地状施設、区画溝、掘立柱建物	土師器、施釉陶器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-7

史跡・名勝 嵐山

発行日 2015年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961